

宴会場を出ると、廊下が意外に寒かったので足早に部屋に向かう。廊下を曲がりエレベーターの前に行った時、私はびっくりしてしまった。

「えっ！ 主任？」

エレベーター前にあるソファーに、さっき部屋に戻ったはずの主任が座っていた。ていうか…寝てる。

「主任、起きてください。風邪ひいちゃいますよ」

「んあー。あ、喜多さん。俺もう飲めないよ」

まだ酔っぱらってる。

「もういいんですよ飲まなくて、とにかく部屋に行きましょう」

そう言っで主任を立てせエレベーターに乗せた。主任は壁にもたれて目をつぶっている。男の人らが泊まる部屋がある階層に到着し、エレベーターが開いたところで私はあることに気づいた。

「あ…主任、部屋の鍵持ってます？」

「もってない」

うっそ、どうしよう…。でもこのまま、主任を飲み会の席に戻すのも可哀想か…。

「とりあえず寒いんで女子部屋に行きますね」

「はい」

そうして私達の部屋がある階で降り、フラフラの主任を連れて部屋に向かった。部屋の鍵を開け玄関口のオレンジの電気をつけると、奥の暗い部屋に人数分の布団が敷いてあるのが見えた。

「とりあえず。ここに座っててください。男の人の部屋の鍵を持つてる人を探してきます」

私が出て行こうとしたその時、主任が私の手首をつかんでグイッと引つ張る。その力が結構強めで、私は主任に覆いかぶさるようにして膝をついた。

「だーめ。喜多さんも飲むよー」

「よ、酔ってますよね？ ていうか、ここ女部屋ですし、お酒も無いですよ」

「あはは、えっ？ なんでこんなところにいるんだ？ 俺」

「廊下で寝てたんです」

「うっそ喜多さん連れて来てくれたんだ。優しいな」

「だって風邪ひいちゃいます」

「ほかのみんなは？」

「まだ飲んでますよ。主任が最初に潰れた人です」

すると主任は私の顔にグイッと顔を近づけて言った。

「いま喜多さんと二人きり？」

「そうですよー、だから男の人の部屋の鍵を持っている人を探そうと思ってたんです」

私がそう答えたのに主任は私の腕を掴んで離してくれない。それだけじゃなく、じーっと私の目を覗き込んで来る。

えつと…。

私も軽く酔っていて、なんとなく目が離せなかった。

主任はスッと唇を重ねて来た。

ん…。

少しの間、二人は静かにキスをした。

主任とキスしちゃった…。

パッと唇が離れた時に私が言う。

「あ、ここ…女部屋だし…マズいです…」

だがまた、主任の唇で塞がれ今度は舌が入って来る。私はそれを受け入れて、しばらくデープキスをした。

ちゅっ♡ちゅぷ♡ちゅぱ♡

心地いい…。

そしてそっと、私の胸に主任の手が置かれた。

あ…。

主任の手が、私の乳房を優しく揉みしだき始める。お酒の影響もあつてか、凄く気持ち良くて抗う事が出来ない…。

でも…。とにかくここでは…。

次に唇が離れた時に言う。

「あつ…主任。あの、誰か来ちゃいます…。ここ一人部屋じゃないから…」

だけど胸を揉む手が止まらない。私の邪魔な口を、また主任が唇で塞ぎ舌を入れて来た。

チュツ♡ちゅぷ♡ちゅ♡

すると今度は主任の手がニットの裾から潜り込んで来る。その手がゆっくり素肌のお腹の上を這いブラジャーに到達、主任はブラの上から揉み始める。そして反対側の手が背中に周り、プツとブラジャーのホックが外された。その事でブラジャーが緩くなり、主任が手をブラジャーの下にもぐり込ませ直接揉み始めた。

「んっ♡んん♡ん♡

コリッ！

「ん！」

びくっ。

主任の指が、私の乳首をつまんでクリンとした。思わずぴくんとしてしまう。

そんな時だった。

コンコン！

ドアがノックされ、私は頭が真っ白になる！ 誰か部屋に戻って来たのだ！

私は小さな声で主任に言う。

「布団にもぐってください！」

主任はコクリと頷いて布団に潜り込み、私は急いで入り口に行つて鍵を開ける。すると同僚の子らが立っていた。

「あーごめんねー。喜多ちゃん。寝てた？」

「あ、はは…寝ようかなと思つてたところ…」

「あたしら、これから温泉行くけど行く？」

「う、ううん。いいや、明日でいいかな」

「そっか」

そう言いながら二人は部屋の中に入ってきた。

やっぱ…。バレル。

そう思ったが、彼女らは玄関のオレンジ電灯の灯りだけで自分達の荷物を見つけて開け始めた。部屋が薄暗いので、主任が隠れている布団の盛り上がり気が付かない。

どうしよう…、とにかく布団の盛り上がりでバレてしまう。。このまま服で寝るのも変だし…。

そう思った私は、何事も無いように服を脱ぎ始め、布団の上に置いてあった浴衣に着替え始める。  
すると同僚の子が言った。

「うわ、喜多さん着やせるんだ。痩せてるのにおっぱいおっきいね」

「えっ、恥ずかし！」

「ごめんごめん。羨ましすぎるわ…」

さっさと浴衣を羽織って帯を締め、そそくさと主任が隠れている布団に体を潜り込ませる。だけどまだ同僚の二人は部屋を出て行かずに、そのままそこで雑談を始めてしまった。

うわぁ…出て行かないんだ。どうしよう…。

すると同僚の子が私に話しかけて来た。

「なんか主任、飲まされて可哀想だったよね？」

「う、うん。飲まされてた」

「べろべろでさあ。まったくうちの社長はろくでもないわ」

「ほ、ホント…そうね」

「ねー」

私がパニックになりながらも、同僚の子の話に合わせている時だった。

スルリ。

えっ？

布団に隠れた主任が、浴衣に着替えた私の素足を触って来た。

うそ！ な、何？

その手がふくらはぎから膝へ、そして内ももへと滑り上がって来る。

わー！ わー！

心とは裏腹に、私は冷静なふりをして黙っていた。その時また同僚の子が話しかけて来る。

「でもさあ、蒼井主任ってカッコいいよね？ あの塩顔と高身長がたまんなーい」

「そ、そうだね」

「なんか休みは、寝てるって言ってたよね？」

「うん…言ってた」

「もったいな！」

いや。その人ここにいます！ 私の内股を撫でてます！

なんて思っていたら、内ももをまさぐっていた主任の手が、スツ…と私の股間に伸びてきた。

「ふわ…」

「ん？」

「な、なんでもない」

私は咄嗟に、主任の手首をつかんで止めた。

な…な…な…何を??

「そういえばさ」

「う、うん」

「この露天風呂って深夜から朝までは混浴なんだって、面白そうだから行ってみようって事になったのよ」

「へ、へえー…」



「寒いしさあ」

「だ、」

だがその時、私が押さえていない主任のもう片方の手が、唐突に滑り込み私のパンティーに到達した。

「…よね…」

うそ！ ちよつとお！

「もしかしたら喜多ちゃんもう眠い？」

「う、うん…少し」

「疲れたよね？」

「うん…」

すりすりすり。

あつ！

主任が、私のおまんこをパンティーの上からなぞり始めた。

「……」

一瞬、声が出そうになったのを堪える。

あつ…ちよつとつ！そこは…。ちよつと…。だめ…。

なんて思っていたら、もう一人同僚の子が言った。

「冷蔵庫にお水とかあるかな…お風呂入る前に水飲んでいこーよ！」

「だねー」

そう言つて部屋の隅にある冷蔵庫を開けた。

「あつた。飲む？」

「飲むー」

その子が湯飲みを持って来て座る。その時、布団の中で主任の指が違う動きを始めた。

ちゅぶ。

あつ…。ダメ…。

私は全力で寝たふりを決めていたのに、主任が私のパンティーの脇から指を潜らせて、直接おまんこを触ってきた。